おお大勝利

平成 22 年度山東サッカー部報第 27 号（2 月 8 日）

サッカー部保護者の皆様、ＯＢの皆様、日頃より本校サッカー部の活動にご理解とご協力を賜りまして、感謝申し上げます。

東北新人　初戦で超完敗

2 月 4 日（金）～6 日（日）にかけて福島県の J ビレッジにて開催されました東北新人大会に行ってまいりました。山形 2 位で参加した山形東の初戦の相手は、宮城 2 位の東北学院高校。宮城と山形では同じ 2 位でもレベルがかなり違うし、大会前の宮城遠征でも思うような戦いができていない山東としては、完全に格上を意識せざるを得ない相手。気持ちの上で受け身に回ってしまうことは悪いことかもしれませんが、**「自分たちは下手だから～はやりきる」というような、弱者が強者を打ち倒す発想をこれまでも常に採り続けてきた山東**だけに、いつも通りの心理状況と言ったところか。海岸沿い特有の強風にあおられることの多い J ビレッジですが、今大会はいずれも穏やかな気候で、山形の銀世界とはもちろん別世界。天然芝ピッチが続く素晴らしい環境の下、東北新人を戦ってまいりました。

2 月 5 日（土）、東北新人一回戦の相手は東北学院。ここ最近の遠征でいずれも立ち上がりの失点が目立っていた山東だけに、格上を相手にしてまずは立ち上がりに集中していく共通理解の下、キックオフを迎えました。試合が始まると、ことごとく 1 対 1 で負け続け、東北学院が工夫をせずとも押し込む展開。山東は 1 対 1 で後手を踏み、ボールを奪っても DF がクリアボールをしっかり蹴ることができず[1]、また MF・FW はボールを収めることができず、山東サイドのピッチで東北学院の攻撃を受け続ける。序盤ですでに明らかになる両チームの力の差。自分たちの力を過信していたわけではありませんが、ベンチから見ていて、**正直泣きたくなるくらい山形東のパフォーマンスが低い。**立ち上がり 5 分、10 分での失点が濃厚な展開。なんとか凌いで、前半の中盤を迎えたはいいものの、繰り返される右 CK（東北学院からすれば左 CK）、ニアサイドでの見事なヘディングシュートにより、先制を許す。劣勢になることを前提に、状況が悪くても声を掛け合って最後まであきらめずにサッカーをしようと呼びかけていた効果か、**先制は許しても味方を鼓舞する声がしっかり聞こえる。**先制されて一安心、というのはおかしな話ですが、この新人チーム、「元気がない」「声が出ない」とこれまで言われ続けてきた（自分たちで言い続けてきた）だけに、最低限のことはできておりました。その後も

---

[1] １．タッチライン（横のライン）にボールをクリアするにしても、できるだけ前に蹴りだして再開をなるべく自陣ゴールから遠ざけなければなりませんが、それができていない。２．特に浮き球をしっかり蹴ることができず、クリアが中途半端。

猛攻を受けましたが、得意の粘りで、前半をセットプレーからの一失点にとどめてハーフタイムへ。

「あれだけ攻められて、一失点はまさに御の字。ディフェンス陣が不安定ながら最後ではしっかり体を張っている。あとは後半、オフェンス陣が少ないチャンスをものにすれば面白い展開になる」などと語りかけると、選手たちの表情は決して悪くない。やはり、最初から彼らもこの展開を予想していたからか、極端な劣勢にも動揺が感じられない。あとは後半巻き返す力があるか・・・不安な気持ちを抱えたまま選手を後半のピッチに送りこみました。そして後半・・・と後半の展開を記述したいところですが、正直な話、感想は一方的にやられた、すべての面で相手が上だったというだけです。**得点を感じさせるシュートが実質ゼロだった、というだけにとどまらず、複数本パスをつなぐことすらできませんでした。**東北学院の前線からのプレス（ハイプレス）がすさまじかったこともその理由の一つでしょう。確かに東北学院は、去年までのイメージよりもハードワークが意識されており、守備の連動が素晴らしかったです。しかし、複数本すらパスがつながらないのは、いくら何でもやり過ぎです。ハイプレスをかいくぐる技術・アイディアが全くなく、ただ蹴るだけの山東。状況判断が全く伴わずにただバタつく姿は、監督として猛反省させられました。結局、流れからきれいに崩され、一失点し、０－２で試合終了。**GK マサのファインセーブ・前へ出る強い気持ちと、猛烈な劣勢でもあきらめなかった（選手全員の）メンタリティだけが収穫の、東北新人大会でした。**

試合終了後、青森山田を PK 合戦で破った富岡高校 B？と B 戦を行い、東北大会に参加した全員が天然芝を堪能。6 日は 2 回戦を観戦し、選手は試合分析。交流戦は試合の枠の関係で組むことができなかったため、J ビレッジにてフィジカルトレーニングを行い、福島をあとにしました。個人的には、2 回戦で富岡をハイプレスと最終ラインの堅実な守備で押し切った**東北学院の力強さ**と、全員がボールに関わり、次の展開を瞬時に読んでプレーし続ける**聖和学園のインテリジェンス**[2]に、強い印象を受けました。

結局、決勝戦は、準決勝で羽黒を４－１で破った聖和と、東北学院を３－１で破った盛商との間で戦われたそうです(結果は現時点でわかりませんので記載しません)。**遠く、福島まで多くの保護者の方が応援に来てくださいました。ありがとうございました。**今回の**超完敗**にもめげず、まずはサッカーに取り組む姿勢（オフザピッチ）から立て直しますので、変わらぬ応援よろしくお願いいたします。

---

[2] 聖和学園の選手はその巧さだけがクローズアップされがちですが、**次に味方がどのようにプレーするかを察知し、どのような展開になりそうかを読む力、平たく言えば「サッカーをよく知っている」点が最も素晴らしい**と思いました。たとえばこんなシーン。①右サイドバックが右の深いところをドリブルで仕掛けましたが、②相手 DF がセンタリングを上げさせまいとしっかり対応、このままいくとゴールラインを割ってしまう(か、無理に蹴って相手の足にあたり CK をゲットする程度の)状況、③それを感じたフォローの選手が、急加速してその右サイドバックの後ろを横切り、④右サイドバックは足裏でバックパス、後方をゴール方向に走った選手を活かしました。私が読むに、あのシーン、聖和の右サイドバックはかわして（抜いて）のセンタリングを本気で狙ったと思いますし、フォローの選手はセンタリングを上げるだろうと当初思って距離を詰めなかったのでしょう。すなわち、右サイドバックの仕掛けは後ろの選手を活かすフェイントではなかったと見ました(そういうプレーも聖和の選手は得意なのですが)。しかし、思いの外、右サイドバックが苦戦したのを瞬時に察知したフォローの選手が、その事態を打開しようとバックパスを要求、阿吽の呼吸で右サイドバックがバックパスをして、流れるような攻撃につなげました。